

南

展覧会というものの常識を覆す展覧会が現在、大阪千里万博公園内の国立民族学博物館で開催されている。会館二十周年記念の特別展「異文化へのまなざし―大英博物館コレクションにさぐる」。総出品点数が一万点に上るといっても、常軌を逸している。だが観客に期待されているのは、それらの展示品を眺めることではない。むしろ展示品を眺めるといふ態度そのものが問題にされているのだ。博物館の展示とは、そもそも何だったのだろうか。

### 出現する大英博物館

入り口の写真、パネルのトンネルを潜ってゆくと、カラーからモノクロへとだんだんに写真が時代を溯ってゆくの気づく。はてな、と思った頃合いに、眼前には、一九一〇年当時の大英博物館の姿が現れる。当時最新の白熱灯の下、ガラス貼りの木製陳列ケースには、かつて大英帝国が蒐集し展示したままの有り様で、アフリカやオセアニアの槍や壺、道具や祭器が、整然と再現される。

その前には、キャプテン・クックがハワイから招来した人面大鉢や、エミール・トルディがクバ王（現在のコンゴ人民共和国中央部）から持ち帰ったムボップ・ペリエーン・アンチエ王の肖像と称する木彫などの「名品」が、宝物のように鎮座している。そこに漂う不思議なノスタルジックで微かな違和感はどこから来るのか。その答えは続く日本の陳列

# 潜む視覚の政治学

うした盲点を検証するのが二階の展示だ。例えば、現在のガーナ共和国とニア湾沿岸の民族、ファンティの社会では、植民地時代、アサフォと呼ばれる軍事結社が存在した。その旗には頻繁にユニオン・ジャックが縫い込まれている。それはどうやら強大な軍事力の暗喩としての意味を担っていたらしい。だがこうした外来の要素の混入は、

純粋な民族学資料という定義とは折り合わず、意図的に無視された。文化イメージの決定権

翻って日本のことを考えてみよう。李妍淑イ・ヨンスクさんの名著『国語』という思想が明快に説くところ、純正な日本語などといったものは明治このかた、この国には存在していなかった。朝鮮半島や満洲国などの「外

理解が、当時「内地」でなお確立していなかったことが、植民地経営を通じてはじめて露呈した。国語の規範性にせよ、文化のアイデンティティーの基礎にせよ、それらは自然の現象であるどころか、対外的なプロパガンダとそれに即応する内的な整合性確立の政治的な意思との相乗のうえに築かれる、擬制的な再構築物といったほうが正確だ。それは弱い立場に

稲賀 繁美



いなが・しげみ 国際日本文化研究センター研究部助教授。昭和32年、東京生まれ。東京大学大学院比較文学比較文化課程単位取得退学。パリ第七大学博士課程終了。三重大学文学部助教授を経て、今年から現職。著書に『絵画の黄昏』（渋谷クロード賞、サントリイ学芸賞）。共著に『異文化への視線』など。

地」で日本語教育に携わった責任者たちは、規範とすべき日本語の確立を、文部省当局に対して、急務として要請した。つまり、「日語」となるものを教えようにも、己正當化のために悪用されることその文法規範や発音・綴りの共通も少なくない。「国際社会」で流

